

F-13 死者祭祀の観念および行動の変容

お茶の水女大家政 川崎末美

目的 夫婦家族制イデオロギーと伝統的な死者祭祀の観念や行動は矛盾すると考えられるが、ここでは現代家族における死者祭祀の観念や行動は変化しているのか否か、変化しているならばその程度と規定要因を明らかにしようとして試みた。それが今後の家族変動を推測する上での手掛りの一つになるのではないかという問題意識に基づいたものである。

方法 対象は福岡県下の農村(糸島郡、筑紫郡、三井郡)の農家、および都市(福岡市とその周辺)の被雇用家族の夫婦双方で、農村で16票、都市で36票の無効票を除き、農村、都市各100組の有効票を得た。1~2週間の留め置き調査法で、1977年7~8月に実施した。

結果 祭祀観念は祭祀観、供養対象、供養心情、祭祀範囲に対する態度、年忌法要の期限に対する態度の5項目を、祭祀行動は祭祀範囲、年忌法要の期限、供養頻度の3項目を内容とするが、祭祀範囲に対する態度を除く祭祀観念、および祭祀行動は家族意識の変化に対して相当遅れている(ただし家族意識の新旧との相関関係のないことが明らかになった供養頻度は考察の対象から除外した)。しかし夫婦家族制イデオロギーに適合する方向への変化はみられ、その規定要因は以下に示す通りである。まず祭祀観念に関しては家族意識の新旧、地域・業態、世帯来歴(創設世帯か相続世帯か)が、祭祀行動のうち祭祀範囲に関しては、地域・業態、世帯来歴、宗教(既成仏教の新宗教か)が、年忌法要の期限に関しては地域・業態が、供養頻度に関しては家族の世代構成(2世代家族か3世代家族か)、性別(夫か妻か)が、それぞれ規定要因として働くことがわかった。